

チャールズ・デイケンズ小論

若葉幹人

チャールズ・デイケンズ（一八一二—一八七〇）

はイギリスの作家である。彼が活躍した時代は、19世紀半ば、イギリスロマン主義からヴィクトリア朝時代へと移行する時代であった。心の内面を重視するロマン主義の時代が、ヴィクトリア女王が即位した一八三七年まで続き、それからは現実を直視する時代へと移る。ヴィクトリア朝時代は一八三七年から一八七〇年まで、実に半世紀にわたって続いた。この時代の特徴としては、近代の機械的な時代で、内外面を問わずに、あらゆる意味で機械の時代である。産業革命が本流となり、国の工業化が始まり、労働者階級が多くの不満を持ち、普通選挙権を求めてチャーティスト運動を展開した時代である。中級階級は富を得たものの、貧者が増加したのもこの時代で、都会にスラムが多く発生した。この時代の文学者は前述のような悲惨な状況と立ち向かっていかなければならなかった。そのため、彼らは中産階級の社会から外へ踏み出し、社会の底辺に向けられ

た。

デイケンズもその様に考えた文学者のひとりであるとともに、ジャーナリスティックな面を持った作家であり、新聞記者の経験があった。この時代の出来事を報道する人間として作品に反映させていった。

一八三七年に発表された『オリバー・ツイスト』は貧者を直視する文学を象徴する作品であり、前述のようにジャーナリスティックな面が垣間見える。『オリバー・ツイスト』は、孤児院で育てられた少年オリバーが主人公である。貧困の中でいじめや犯罪に巻き込まれる。結局この物語はハッピーエンドを迎えるが、デイケンズは、同作品第3版序文の中で、登場人物には「粗野で醜悪なものが社会の中に存在すること、それ自体が否定できない『厳粛かつ明白な事実』なのだ」と主張して、この事実を隠さずに書くことがこの目的の一つであり、ここからもデイケンズのジャーナリストとしても一面が見られるだろう。

『オリバー・ツイスト』が人気作品となったディ

ケンズは、そのジャーナリズムな視点から、社会的底辺に居る貧しい人々、虐待を受けている人々を主人公とした作品を次々と発表して、登場人物の悲惨な生活を克明に描いていた。この点でいえば、18世紀中葉、イギリスから次第にヨーロッパ大陸に広まっていった近代写真主義の小説を書き続けたと言っても過言ではない。デイケンズの初期作品を概観すると、過度の喜怒哀楽があり、楽天的倫理観や大衆が求める勸善懲惡が多く見られると言える。

デイケンズは作家生活の中期である一八五〇年に『デイヴィッド・コパフィールド』という作品を発表した。この作品はデイケンズの作者の精神形成史をユーモアとペーソスを交えて語った半ば自叙伝的な作品で、彼自身の作品の中で最も長い作品である。主人公であるデイヴィッドは父亡き後に誕生し、母を早くに亡くし、孤児同様に育てられ、継母のいじめに遭い、大伯母の世話になるというストーリー展開である。デイケンズの半自叙伝的作品であると前述に書いたが、物語の大半がデイケンズの作家になるまでの人生経緯と何らかの意味が繋がっているとと言える。

デイケンズは、借金苦で彼以外の家族が皆刑務所

に入れられ、彼自身も学業を中断し、少年の身で工場に働きに行かされるというみじめな経験をしている。当時のイギリスでは債務を抱えることによる生活困難者に対して、このような措置が取られたそうである。それでもデイケンズは、この当時の思い出を『デイヴィット・コパフィールド』の中でユーモラスに描いている。質屋の場面では見舞いに来たデイヴィットに対して養父ミコーバは、金の使い方についてデイヴィットを訓示する場面が描かれ、用件を済ませながら、彼にラテン語を教授した場面が描かれている。

『デイヴィット・コパフィールド』を発表した頃から、デイケンズの作品に変化が出てきた。それはデイケンズが描く小説の生涯のテーマが見えてきたのだ。例を挙げると、『荒涼館』では、風刺や社会批評を効かせたものと変貌していき、イギリス大法院における事務遅滞を徹底攻撃し、『無情の時代』では、功利主義的思想が、この時代の諸悪の根源とされた。同作品において、工業都市であるマンチェスターをモデルとしたコークタウンに居住するトマス・グラッドグラインドは、功利主義の狂信者で、世界で認められるのは事実と統計のみであると説

き、人間性を豊かさに満ちたものにする情緒活動等は一切害悪として観ている人物であると描かれている。『無情の時代』の冒頭では、トマスが経営する学校で、新米教師と生徒の前に「事実以外は教えるてはならない」と語っている。

この場合の事実とは、デイケンズが前述の『オリバー・ツイスト』の序文にて書いている「事実」とは異なり、「歯の表面は何でおおわれているか」という類の事実であった。グラッドグラインドは、自分の子供にも以上のような事実万能主義教育を受けさせるのであった。このことで、息子は冷酷かつ利己的思考動物に成長し、娘は恋愛感情さえ^{わきま}弁えない、へんばな女性に成長した。事実を教えたことで、人間としての当たり前の感情を有しない、筆者が思うに冷酷非情な人間が多く登場する小説を書くようになっていったと思う。その反面、『クリスマス・キャロル』のように、守銭奴の主人公スクルージが、クリスマス・イヴの夜にすでに他界したマリーリーの亡霊と対面して、3人の精霊に逢うことで、自らの未来を知り、町の人々のために親切な人物に変貌したという、メルヘンチックな物語も描いている。その作品でも主人公は金の為なら冷酷非情に財

産を無搾り取る現実的な人間に描かれている。現実主義・事実を描いたデイケンズであるが、その中でもユーモアや風刺というものを大切にされた作者と言えるだろう。

二〇一四年七月一日・記